
日本中国語学会々報

2010年6月

◆目次◆

会長致辞.....	1
村上嘉英先生への名誉会員称号授与にあたって.....	2
支部例会実施報告 2009.12-2010.5	3
会議報告.....	9
本会への寄付について.....	14
例会および全国大会開催のお知らせ.....	14
名誉会員の推挙について.....	14
事務局からのお知らせ.....	15

会長致辞

平田昌司（日本中国語学会会長）

5月29日天朗气清，跟几位同事同学陪同海外客人去参观了京都东山山脚下的著名禅林东福寺。活动完毕，在二条大桥畔的旅店跟客人分手后，在河流潺潺的鸭川边上往北走，初夏的蓝天让人感觉舒适惬意。该谈的话题都谈过了，大家的脚步开始带一点倦意，我的注意力完全放在北山山头的几朵白云。突然听到有一位叫秋水庄子的学生的声音：“彻底理出汉语的语言规律，这才是研究汉语的快乐！”这时候，濠上惠子君立即回应一句话：“你可不是中国人，汉语不是我们的母语，不可能有完美的语感，你怎么可能知道研究汉语的快乐？”庄子君开始反击：“你可不是我，怎么知道我没掌握汉语的语言规律！”惠子君也不认输，辩论一直持续到加茂大桥附近，十分热闹。

我落在他们几个人的后面，并没有介入这一场辩论。而且听到这种辩论并不是第一次。曾在学校食堂里看到有几个学生聊天，话题就是我们能否真正体会西方语言或学术的真面目，其中一些人的意见是相当悲观的：自己到

底明白了没有，或是懂了，或者只能算勉强懂得了，至今一点也不踏实。甚至还有一个人断定：不管投入多少时间，我们无法弄懂外国的语言文化。

话题回到汉语研究的领域。杉村博文先生有一句名言：对日本人来说“汉语是研究的对象，但更多是而且永远是学习的对象”。非母语者的这种憧憬、迷惘、彷徨、执著必然让日本“中国语学”形成了自己的研究史和学术风格。它跟母语者所谓“中国语言学”不可能完全一样，同时跟 **Chinese Linguistics** 不可能没有区别。当然，一个领域的学风有通有变。本会只不过是一个日本国内的学会，但已经拥有了不少海外会员。我个人希望本会一面继承固有的良好传统和运作方式，一面在内外会员之间达到双向互动的效果，最后能够开拓崭新的视野。今年秋天在神奈川大学召开的第60届全国大会以及本会各支部的日常活动都是很好的契机。维持本学会的规模和学术水平完全依靠各位会员的积极参与和支持！

另外，趁这机会恳请各位会员的谅解和协助。据最新的统计，日本国内有关语言研究领域的学会中，日本語学会（The Society for Japanese Linguistics）最大，会员人数多达 2200 名。日本言语学会（The Linguistic Society of Japan）2000 名，日本英语学会（The English Linguistic Society of Japan）1600 名。而本会会员人数将近 1200 名，论学会的规模竟然排名第 4。不过，前 3 名学会长期以来得到出版社积极稳定的支持，学会本身的机构、人员也比较完善充足。而本会的日常事务主要由会长、各委员会、干事（学会秘书）处理。这些人员的本职工作是大学教师，不得不抽出从事教学、研究、学校行政的业余时间为学会服务。这情形有时难免影响处理事务的速度，给各位会员带来不便。或许海外会员禁不住要提问：为何不把一些事宜交给研究助理？我们不得不郑重奉告：由于国情不同，日本各大学人文学科的

教授普遍没有研究助理，许多事情亲自动手，自然而然地“多能鄙事”。这一点要请海外会员宽容对待。我们非常乐意为会员尽其绵薄之力。

末了，本人谨代表全体会员向前会长杉村博文先生、任满卸任的理事岩田礼先生及木村英树先生表示由衷的感谢。尤其感谢前干事铃木慎吾先生、泽田达也先生，他们两位为了本会事务献出了大量的时间和智慧。

祝各位会员身体健康，教学成功，研究顺利！

2010 年 5 月 31 日记于京都

附记：《日本語学》杂志 2010 年 6 月增刊号是日本国内各语言学会动态专辑，向读者介绍全国 35 个学会的现状。日本中国語学会简介由杉村博文先生执笔，该文扼要地指出了本学会或日本“中国語学”的特色，请各位会员参阅。

村上嘉英先生への名誉会員称号授与にあたって

中川裕三（天理大学）

天理大学名誉教授村上嘉英先生が、2009 年度の本学会総会で、名誉会員として承認された。杉村前会長のお勧めもあり、名誉会員には私が推挙させていただいたのだが、そのような経緯から、ここでも私が先生について紹介させていただくことになった。

村上先生は、長年に渉り現代中国語の方言、とりわけ台湾語の研究を継続してこられた。先生の優れた研究業績は敢えて一々取り上げて説明する必要はないかと思われるが、その研究における労苦は、先年に公刊された『東方台湾語辞典』（2007 年、東方書店刊）として結実した。この辞書は、国内外から、学術的には言うまでもなく実業界からも、極めて高い評価を受けているという。なお、以前出版

された先生の『エクスプレス台湾語』（1995 年、白水社。2002 年 CD 付）は 10 刷を重ね、また昨年上梓の『ニューエクスプレス台湾語』（2009 年、白水社）は早くも 2 刷となっている。マンダリン系の言語が学校教育・メディア等の大きな力により、中国全体を一色に塗りつぶそうとしている現在、方言の現状を、主として語彙の側面から詳細に記述しようとする先生の研究が非常に重要なものであり、それが単に方言研究に止まらず中国語学全体に不可欠なものとして、本学会の発展に大きく貢献しているという事実は、多くの人の認めるところである。

先生は、声高に自己の考えを主張するという方法をとることはない。実証的なデータを

蓄積し、その結果として独自の見解を穏やかに公にするという学風を有しつつ、独自の方言研究の場を広げてこられた。その研究は現在、上述の辞書の刊行という形で大きな成果を上げているが、名誉教授という形で教育の最前線を後輩に譲る年齢にありながらも、台湾語辞典の改訂増補を柱に孜々として倦まぬ学究を日常とし、研究の更なる深化を公にすべく、すでに新たな一步を踏み出されている。本学会への一層の貢献が明らかになる日も遠くないだろう。

また先生には、周囲の者を感化する不思議な力があつた。天理大学が大学院を持たない組織であつたにもかかわらず、先生に感化されて他大学の大学院に進学し、大学教員になった者も少なくない。近年の本学会大会においても、先生の教えを受けた学生が研究発表をしない大会はなく、この点においても先生は、本学会の発展に大きく貢献したといえるだろう。

先生は本学会の理事を長年務められたが、その立場から学会全般について適格な助言をするなど、学会のスムーズな運営に寄与されたということを、今回他の同僚から聞くことができた。また、学会大会が天理大学において開催された際に、先生が他の同僚会員との相互の協力の下、準備段階から大会の運営に

参加し、その成功のために実に大きな努力を尽くしたことは、天理大学内では周知のこととなっている。

以上、本学会との関連から村上先生をご紹介したが、その村上先生は、本年3月、天理大学から去られた。その時を見計らっていたかのように、先生が長年熱愛されたLL教室が最新式のCALL教室に改修された。機材はアナログからデジタルへと進化したが、先生が確立された教授法をこのCALL教室でいかに発展させるかが、先生から私に与えられた課題だと思っている。

－ 略歴 －

- 1939. 愛知県常滑市に生まれる
- 1962. 天理大学外国語学部中国学科卒業
台湾大学文学院中国文学研究所碩士課程修了、
天理大学助手、中国文化大学専任講師、天理
大学助教授、教授を経て、
- 2010. 天理大学退職、現在名誉教授

－ 本会関係略歴 －

- 1966. 中国語学研究会入会
- 1990. 日本中国語学会理事（2005年まで）
- 1986. 日本中国語学会第36回全国大会当番校
幹事（総務）
- 2010. 日本中国語学会名誉会員

支部例会実施報告 2009.12-2010.5

◆関東支部例会

◇2009年9月26日（土）大東文化会館

- ・大島吉郎（大東文化大学）：副詞“却”の意味と用法について—《阿Q正伝》を中心に—

魯迅著《阿Q正伝》は1921年12月か

ら1922年2月まで《晨报副刊》に掲載され、刊行以来、今日に至るまで、作品が及ぼす影響は極めて広く深いと言えよう。日本では1931年より三十種類を越える翻訳が出版されているが、決定版と言える日本語訳は無いのではなかろうか。

本発表は《阿Q正伝》における副詞“却”全50例の意味について検討を加え、解釈及び翻訳に資することを目的とするものである。“却”に関しては先駆的研究として、(1)原由起子 1985「語気副詞<可>と<并><倒><却>」(『中国語学』232)。(2)森中野枝 1998「中国語の副詞“倒”について—“却”との比較を通して—」(『中国語学』245)がある。近年の虚詞研究の成果も踏まえ、作品に見える用例を検討する。

・高橋弥守彦(大東文化大学)：「“過”＋空間詞」再考

言語研究の上で、鈴木康之は個別言語研究と対照言語研究に有効な連語論を主張している。発表者は本発表も鈴木康之に倣い、「連語論的な意味」と「構造的なタイプ」から連語を分析する鈴木康之の主張する連語論の観点から連語「“過”＋空間詞」を分析する。発表者は、これまで「“過”＋空間詞」の“過”について、ある場所の通過とその前後左右上下の通過を表す通過義を中心に分析してきた。本発表ではやはり連語論の観点から「“過”＋空間詞」の“過”の訪問義、漫步義、移行義、存在義に言及し、それらと通過義との関係を明らかにする。

◇2009年12月5日(土) 文教大学

・田村新(首都大学東京・院)：黎錦熙の図解法に関する一考察

黎錦熙は『新著国語文法』(初版 1924)で、文の構造と品詞の関係を「図解法」と呼ぶ図表を用いて記述した。該書 p.29の註10によると、「図解法は本書の独創的な記述」とある。しかし、図解法そのものは許地山が『語体文法大綱』(初版 1921)で、すでに使用している。発表者は、黎

錦熙が206カ所で使用した図解と、許地山が45箇所で使用した図解を材料として、黎錦熙の記述の独創性がどこにあるのかを考察したい。また、発表者の調査では、黎錦熙の品詞などの体系は、1940年代まで多くの研究者によって踏襲されるが、図解法を踏襲した研究者は見あたらなかった。その理由についても解明を試みたい。

・石村広(二松学舎大学)：使動用法と使成式の継承関係

使成式の成立に関して、王力(1958)は「前代の単音節動詞における他動詞的機能に代替するものである」と述べ、新たに出現したこの文法形式が、古代使動用法の衰退・消失と密接に関わっていることを指摘している。しかし、「使動用法の消失」によって、使成式の分析に大きな不都合が生じることになった。この構造を特徴づける肝心の使役のありかが説明できなくなったのである。本発表では、使成式の使役義は語順によって表わされるとの考え方(石村 2000)に基づき、現代語では複音節構造に形をかえたものの、使成式と統語レベルにおける古代使動用法との間に継承関係が認められるのではないかという試論を述べたい。

・史隼(一橋大学・院)：「“這麼／那麼”QP」構造における指示詞の機能

本発表では、中国語「“這麼／那麼”＋数量名詞句(QP)」構造を対象に、指示詞“這麼／那麼”が果している機能について考察する。先行研究では、QPを修飾する指示詞を「強調の指示詞」と指示詞““冗余的”指示詞」の二種類に分類しているが、「“冗余的”指示詞」については具体的な分析が

なされていない。本発表では、「強調の指示詞」「“冗余的”指示詞」の機能について考察をおこない、特に「“冗余的”指示詞」について、「その数量を基準とする一定の範囲に程度化する」という機能を果たしていること、そして、その機能が日本語の概数表現「ほど／ぐらい」に近いものであることを論ずる。

・高橋弥守彦（大東文化大学）：連語論から見る時間詞の語順について

時間詞は一般に時間名詞(時間を表す“以前、以后”などの方位詞も含む)と時間副詞とに大別できる。時間名詞(連語)が、状況語となる場合、主語の前後に用いることができる。時間名詞を主語の前に用いると強調だといわれている。時間副詞が状況語となる場合は、主語の後、述語の前にしか用いることができない。なぜこのような言語現象になるのか、本発表では連語論の観点から以下の3点を明らかにする。

- 1) 時間名詞が状況語となる場合は、なぜ主語の前後に用いることができるのか。
- 2) 主語の前に用いられる状況語としての時間名詞はなぜ強調されるのか。
- 3) 状況語となる時間副詞はなぜ述語の前にしか用いることができないのか。

・荒木典子（早稲田大学・非）：明清白話小説における二種類の是非疑問文

是非疑問文“VP 吗”（“ma”の表記は様々であるがここではまとめてこのように呼ぶ）は、元代から清代の間に急激に増え、現代の普通話では是非疑問文として一般的に用いられている。明清白話小説にはもう一つよく使われる是非疑問文として、疑問副詞を用いた疑問文（“可 VP”

型疑問文と呼ぶ）があった。使用頻度や、“可”自身の疑問を表す強さは作品によって異なる。本発表では、両者が共存するいくつかの作品を調査し、“VP 吗”が現在のような是非疑問文に進化する様子を、“可 VP”型疑問文との比較から分析する。調査のポイントは、各作品において優勢なのはどちらか、使い分け（中身のVPの構造の違い）はあるのか、などの点である。

◇2010年3月20日（土）明海大学浦安キャンパス

- ・藤井游惟（元国際交流基金海外派遣日本語教育専門家）：日本漢字「呉音」の原型は山東方言音-漢字音は山東→朝鮮→日本と伝播した-
- ・仇曉芸（東北大学大学院）：外国語固有名詞とその中国語音声転写の音節数
- ・李軼倫（東京外国語大学大学院）：動作の進行・状態の持続を表す副詞“正”と“着”の関係について
- ・薛芸如（元智大学/東北大学大学院）：漢語存在句中的動貌標誌
- ・平山邦彦（拓殖大学）：“他的年紀比我大”類の“比”構文について
(要旨は次号に掲載します)

◆北陸支部例会

◇2010年3月20日（土）石川四高記念文化交流館

- ・宇佐美洋（国立国語研究所）：「だって、しょうがないぞ、もう」-ロールプレイコーパスから見る日本人・中国人の謝罪方略の違い- [ゲスト講演]
「友人同士による謝罪場面」を設定し、日本語母語話者(JP)・中国語母語話者(CN)

に、母語によるロールプレイを依頼し、その発話データをコーパス化した。このコーパスを用いて、謝罪者が用いている語用論的方策の違いについて検討したところ、CNはJPに比べ、謝罪時に「しょうがない」「わざとじゃない」など、自己の責任を回避するような発話が明らかに多かった。そしてその違いは、謝罪において「責任の所在を明らかにする」という行為を、JPは謝罪する側が行い、CNは謝罪を受ける側が行う、という「謝罪における役割分担の違い」に起因することが分かった。こうした研究例も取り上げつつ、学習者コーパスが教育にどのように寄与しうるかについて述べる。

・大滝幸子（金沢大学）：パラレルコーパスを用いた日中対照研究と教育の事例分析

パラレルコーパス（多言語・文脈平行表示コーパス）には、正文の原作と翻訳を並べた「対訳コーパス」と、片方が正文もう片方が誤文の「学習者コーパス」という2種類がある。各々、その異なる用途のために作成され、その用途に基づいて検索機能の設計、統計数値の出し方が決定づけられている。本発表では、対訳パラレルコーパスを授業や論文作成に用いた事例報告と、その研究用ツールとしての可能性を述べる。また、学習者コーパスの設計上の難点と、その教育研究用ツールや研究用ツールとしての可能性を考察する。

・陳会林（金沢大学・院）：「如果」の使用動機に関する一考察—日本語の条件表現形式と比較して

本申請は、中国語条件表現の代表的な形式とされる関連詞「如果」を取り上げ、

下記3点の問題意識をもって考察した結果を発表したい。(1)日本語条件表現と比較しながら「如果」の使用範囲を確認した。(2)「如果」の使用にあたって、接続関係を強制的に決定づける場合とそうでない場合がある。それぞれの場合は「如果」にかかる音声的情報が異なった振る舞いを呈するか否かを考察した。なお上記2点はパラレルコーラスを用いたインフォーマント調査の結果に基づいて考察を進める。(3)上記2点の結果を踏まえて、語用論的観点から「如果」の使用動機を試論した。

・林智（金沢大学・院）：現代中国語における形容詞の多変量解析とコーパスシステム開発

発表者は、品詞タグが付加された現代中国語コーパスに対する多変量解析の結果、形容詞の重畳形が原形となる形容詞とは異なる要因でクラスタ分類される事を明らかにした。この分析結果は、原形の分布に影響する要素と重畳形の分布に影響する要素が数量的観点からいって全く違うものである事をあらわしている。またこのような分析を可能にするコーパスシステムだが、本年度はさらに最新の技術を用いて特に管理面での利便性を高めるための開発を継続して行っている。

◆関西支部例会

◇2008年12月6日（日）同志社大学大阪サテライト

・王志英（沖縄大学）：对怎样教授汉语动词重叠的一点新建议

我们一向认为动词重叠表示“少量、轻微、婉转”等意思。(1)你好好看看你的作业!(2)他仔细地想了想。但以上的动词重叠都不

能译为“一下”等。本稿主张，汉语的动词重叠表示“不定量”和“部分完了”，根据动作者的意志，动作的量可以是“少量”或“多量”。动词重叠的后边如果加上“~看(看)”、或“~试(试)”的话，其动词重叠也就带有“~看(看)”、或“~试(试)”的意思。说话人用动词重叠，可以说出自两个动机。一个是说话人本人或第三者对动作量的多少说不准，就用了动词的重叠。另一种根据 Leech1983 的对人礼貌的原则 (Tact Maxim)，是说话人有意地要把自己的请求模糊化，以使自己的请求得以实现。

・張恆悦（龍谷大学・非）：ABCD タイプ擬声語重ね型への認知的アプローチ

現代中国語の擬声語において，AA（哗哗），ABAB（哗啦哗啦），AABB（哗哗啦啦），ABB（哗啦啦）のような一定の「基式(baseform)」の組み合わせによる重ね型もあれば，ABCD（稀里哗啦）のような子音や母音の交替による重ね型もある。本発表ではこれまであまり取上げられてこなかった ABCD の意味機能の分析を試み，ABAB や AABB との比較を通じてその認知的メカニズムを明らかにする。

・梁淑珉（大阪市立大学・非）：時間表現の数量構造について

時間表現の数量構造は、文法書・入門テキスト・辞書に解釈されており自明のように思われがちだが、その説明はなお不足している点がある。60分単位を示す数量構造を例にとれば、「X点钟」について、「点」を量詞、「钟」は名詞とする説と、「点钟」を量詞とする説がある。「X小时」は、「小时」を量詞とする説と、名詞とする説、準量詞とする説が存在し、

品詞の位置づけに関して不明瞭な点を残す。また従来の研究では、現代語のみに着目しており、時間表現の成り立ちについてはあまり注目されてこなかった。本発表は、こうした時間表現の数量構造における不整合を歴史的観点からの再整理を試みるものである。

・秋谷裕幸（愛媛大学）：原始寧徳方言古音構擬一单元音韻母部分

本発表ではまず、閩東区方言のなかで上声と陽去が閉音節においてのみ対立し、なおかつ音節末子音 m, n, ŋ, p, t, k, ʔ を保存する方言を「広義の寧徳方言」と定義づける。これらの音節末子音は廈門方言等閩南区方言にも存在するが、広義の寧徳方言においては、低母音に後続する場合にもこれらが保存されている点に注意される。また寧徳方言に属する諸方言は、声母、韻母とも他の閩東区方言よりも大きな変化を被っており、その変化過程自体も音韻史的に興味のつきないものである。以上の内容を述べた後、短母音韻母を例に再構の実際を紹介し、会員諸賢の意見を賜りたい。

◆中国支部例会

◇2010年4月25日（日）広島大学東千田キャンパス

・柯惟惟（広島大学・院）：台湾における新日系外来語について-語彙分類の試みを中心に-

“寒天”，“達人”のような中国語の表現ではない新日本語外来語は「哈日（ハーリー）」「ブーム」によって、台湾にやってきた。テレビニュースから広告，新聞，雑誌まで，多くのメディアに現れ，使わ

れている。謝雅梅は『日本に恋した台湾人』(2000)で“歐達古”(オタク)，“卡娃依”(かわいい)，“皮卡丘”(ピカチュウ)のような中国語の辞書に載っていない、より新しい日系外来語がすでに台湾の若者たちの語彙の一部となっていると書いてある。本稿では、これらの語彙の使用状況を調査し、どんな分類ができるのか、そして、どんな傾向があるのかを中心に述べる。

・ 丁雷 (広島大学・院) : 浅谈汉语语音节奏训练

近年来,在国际汉语教学方面,日本和美国都出现了一些新型的汉语语音教学思路和模式方面的尝试。其中,使用“节奏”来引导汉语语音训练是一个比较有特色的新型教学法。这种方法在一定程度上能够加大学生的汉语输出量,提高学生汉语语音输入和输出的能力,丰富语音课的教学内容并增进学生的汉语语音学习热情。然而,在推广这类教法的过程中,笔者发现,“节奏”和真正的自然语言的节奏是否相同,两者有什么样的关联,“节奏”训练能不能起到快速提高语音能力的作用,这些疑问并没有得到理想的解答。显然,要解释这些问题需要我们对这种教法中的“节奏”有一个客观的认识。本文从节奏自身出发试分析“节奏”与节奏之间的关联性,重新审视“节奏”训练对语言能力培养的重要性,并提出一些意见和建议。希望这样的研究能对今后的汉语语音教学带来一些启发。

・ 郭春貴 (広島修道大学) : 二外汉语教学模式再探讨 (一周两节课的教学模式)

日本大部分大学的二外汉语课都是一周两节。究竟现有一周两节汉语课的教学效果如何?它存在一些什么问题?怎么解决

这些问题?还有怎么发挥这一周两节汉语课的特长,来提高二外汉语教学的质量呢?本报告先介绍这10年来广岛修道大学二外一周两节汉语课的问题所在,然后从大学教育的理念,以及学生与教师的问题来分析这一周两节课的优缺点。最后从二外汉语教学的目的目标的角度,谈谈最近广岛修道大学展开的一周两节课的教学模式。

◆九州支部例会

◇2009年12月12日(土)福岡大学

・ 徐佩伶 (九州大学・院) : 中国語の「V得XP」の意味と構造

本発表では、中国語の「V得XP」構文の特性について一般化を行う。「V得XP」はイベントの「結果」,「様態」,「程度」などを表している。先行研究では、それらが異なった構造を持つと仮定されているが、本発表では、先行研究とは異なり、共通の構造を持つと主張する。異なった解釈は「境界」という概念に基づき、XPの語彙特性と語用論の知識から派生されうる。「境界」を持たないXPの場合、イベントの「様態」の意味が導かれ、「境界」を持つXPの場合は、時間の境界と量の境界でイベントの「結果」とイベントの「程度」の意味が導かれる。この結果は程度副詞の「很」との共起制限と、「得」「到」の交替現象から支持される。

・ 翟勇 (九州大学) : 中国語の「対」構文処理-英語母語話者中国語学習者に着目して-

心理言語学において、*dui*-構文は非常に重要な構造を持っている。1) *dui*により、NP1, NP2 がともに動詞の前に現れうる。2) [NP1] [*dui*-NP2] [V]の *dui*-NP2 は文頭に置くことができる。本論文では、「対」

構文を取り上げ、英語を母語とする中国語学習者を対象に中国語「対」構文処理の実験を行った。実験の結果、初級学習者は位置・距離などの「知覚の方略」を用いて「対」構文処理を行い、中級学習者は「知覚の方略」だけではなく、動詞 *shuo* を利用するという「言語的方略」も用いるようになり、習得度が高い上級学習者は即時的に動詞の語彙情報を利用する「言語的方略」に移行することが示された。

・ 苞山武義（関西学院大学・院）：動作主移動と対象移動の事象構造

本発表では、日本語と中国語の対照の観点から、両言語の移動事象における動作主移動と対象移動の事象構造について、主に、それら移動物と動詞との統語的選択制限と意味的制約を考察する。

・ 有働彰子（西南学院大学・非）：教科書中の「台湾国語」—軽声語及び接続詞“和”の発音をめぐる問題を中心に—

所謂「台湾国語」については数多の先行研究があるが、視座が言語規範に置かれたものは多くない。しかし教育の発達した社会における言語変化には「どう教えられたか」という問題も深く関わっており、欠くべからざる視点であろう。例

えば台湾では“hàn”と発音される接続詞“和”の問題、また軽声語の極端な少なさについても、「国語」教科書の歴史からその関連性が見えてくる。台湾では“和”の規範的発音は一貫して“hàn”であり、また軽声の重要性が強調されたのもごく短期間であった。本発表では、「国語」教科書の調査結果をもとに、台湾で「国語」が、特に「台湾国語」と呼ばれる言語現象がどのように教えられてきたかについて分析する。

・ 千島英一（熊本大学）：「国字」（和製漢字）の広東語読音について

「峠」「柝」「彙」「駮」「梅」...といった文字は、いわゆる国字としてよく知られている。ところが、これらの国字について、現行の多くの中日辞典では発音どころか収録すらされていない。また、中国で出版されている『日本汉字读音词典』（商务印书馆）といった工具書でも、中国伝来の文字についてはピンインが付されているが、国字については注音が付されていないことから、普通話においても、発音の手がかりになるものがきわめて乏しい。そこで、本発表では、こうした国字をいったい広東語ではどう発音したらよいか、を検討するものである。

会議報告

■ 2010年度第1回（『中国語学』第257号）編集委員会

日時：2010年3月23日（火）13時～17時

場所：京都大学文学部地下大会議室

出席者：木津祐子（委員長）、太田斎、小野秀樹、三宅登之、楊凱榮（以上委員）

【議事】

1. 『中国語学』257号投稿状況

総数30編の投稿論文を受理した。

2. 査読体制

投稿論文の分野を考慮の上、各論文3名の査読者を決定。査読報告書の提出期限は、5月

7日(金)とし、5月15日(土)の第2回編集委員会にて採否決定を行うこととした。また、査読報告書「チェックポイント」部分の構成に改訂を行い、今回の査読から適用することとした。

3. 『中国語学』256号学会奨励賞

学会奨励賞受賞者として3名の候補者を選出。今後、継続して検討をし、第2回編集委員会にて最終候補者を決定、理事会に推薦することとなった。

4. 『中国語学』257号特集記事

257号の特集テーマは「上古音研究の現在と展望」(仮題)とし、古屋昭弘会員(早稲田大学)、ゼフ・ハンデル氏(ワシントン大学)に執筆を依頼した。

■2010年度第2回(『中国語学』第257号)編集委員会

日時:2010年5月15日(土)14時~17時

場所:ウイングス京都地下小会議室

出席者:木津祐子(委員長)、太田齋、大西克也、小野秀樹、三宅登之、楊凱榮(以上委員)

【議事】

1. 『中国語学』257号投稿論文の採否決定

査読対象論文30編について審査の結果、採用0編、要二次審査8編、不採用20編となった。要二次審査の8編は、6月30日(水)必着で修正論文の提出を求め、編集委員会にて二次審査を行い、掲載の可否を最終決定する。

投稿論文30編の分野別内訳は以下の通り(括弧内は「要二次審査」論文数)。

現代文法	19 (5)
教育	3 (0)
方言	2 (0)
日中比較	2 (1)
語彙	1 (0)

音声 1 (1)

歴史文法 1 (0)

民族語 1 (1)

2. 『中国語学』256号(2009年発行)学会奨励賞

今年度学会奨励賞候補論文2編を決定し、理事会に推薦することとした。

3. 次期編集委員会構成について

本年度にて太田齋・小野秀樹・木津祐子の三委員が退任するにより、次期編集委員会構成について話し合った。

■大会運営委員会

委員:岩田礼(委員長)、今井敬子、松村文芳、石崎博志、岩本真理、佐々木勲人、石汝傑、張勤、増野仁、望月圭子、山田眞一

A. 組織

- (1) 60回大会の開催校である神奈川大学に、加藤宏紀会員を代表とする準備会が発足した。
- (2) 委員会は、今年度より委員を6名増員し、委員10名に委員長1名を加えた11名体制となった。この措置に伴い、委員会予算は12万円→22万円に増額された。
- (3) 委員の役割は、主に、①発表論文の審査と選考、②大会当日の司会及び会場コントロールであること、また各種文書の日本語版・中国語版の作成等に共同で当てることを確認した。
- (4) 今年度から、従来、開催校の準備会が負担していた業務の一部を委員会に移行した。主に発表申込み受付、査読、採否通知等の業務。全体として、7月までは委員会を中心に活動し、8月以降は、準備会に軸を移す。このような状況をふまえて、委員会内部の業務分担体制を定めた。

B. 今年度の大会について

- (1) 今年度の大会を60回記念大会と位置付ける。神奈川大学準備会から、海外から3名の研究者を招聘し、「中国言語学の新潮流」と題するシンポジウムを開催する旨提案があり、これを了承した。
- (2) 委員会は昨年度第2回理事会において、60回記念大会のための補助金増を要請したが、3名の研究者の招聘が決定したことに伴い、今年度第1回理事会において、再度補助金増を要請することとした。

C. 活動

- (1) 「研究発表応募規定」の改定を検討し、中国語版も含め、4月初めに学会ホームページに掲載した。主な改正点：
 - ① 発表申込を電子メールに一本化した（但しやむをえない事情がある場合は郵送による申込みも受け付ける）。
 - ② 応募受付期間を6月1日～28日までと定め、「締切に遅れた場合は、理由のいかんを問わず、一切受理しない」ことを明記した。
 - ③ 新入会員による申込みについて、手続き及び会費納入の期限を厳格に定めた。
 - ④ ポスターセッションについて、「プロジェクターやPC等の機器を使用することもできる。」と定めていたが、「プロジェクターや」を削除した。
 - ⑤ 送付先を開催校（準備会）から運営委員長に変更した。
- (2) 論文査読・審査の作業をスピーディに遂行することを確認した。
- (3) 神奈川大学の準備会と協議しながら「大会案内」を作成した。
- (4) 予稿集執筆要領及びポスターセッションガイドラインは6月末を目処に公表する。

そのため、神奈川大学の準備会に現場の状況をふまえた検討を依頼した。

■ ウェブリソース委員会

1. 通常業務について

ウェブサイトのメンテナンスを例年通り行ない、『電子通説』の発行（月1回）を継続している。

2. 言語系学会連合との関係について

本会も参加している言語系学会連合に、本会の催事情報を提供する業務を開始した。この情報は、先方が取捨選択したうえで、同団体のカレンダーに掲載される。

3. JSTによる『中国語学』の電子アーカイブ事業の進捗状況について

- a. 底本の手配がついた以下の号について、電子化作業を開始した。
 - 45-85, 87-131, 133, 135-150, 152-254号
- b. 作業が完了したものについては、JSTのウェブサイトですでに公開が始まっている。
http://www.journalarchive.jst.go.jp/japanese/jn1top_ja.php?cdjournal=chuugokugogaku1955
- c. その他の号については、底本を選定しつつ順次作業にとりかかる予定である。

4. 本学会ウェブサイト (www.chilin.jp) がウイルスに感染した件について

- (1) 事態の経過は以下のとおり。
 1. 国内某機関より、その機関の関係者が当会のウェブサイトを開覧した際にウイルスに感染した可能性がある旨、報告を受けた（2010年2月12日）。
 2. サイト内の一部のページが改竄され、有害なスクリプトが挿入されていることを発見した（2月12日夜）。
 3. サイトを封鎖し、「www.chilin.jp」にアクセスできないように措置をした（2月12日

午後 8 時 20 分)。

4. 再感染のおそれがあるかどうかを監視した (2 月 13 日～16 日)。

5. 再感染のおそれがないことを確認し、サイトを復旧 (2 月 17 日) した。トップページにウィルス感染の事実とウィルスチェックの勧告を掲載した。

6. 感染経路は不明である。

(2) この事件以降、セキュリティ対策とサイト監視を強化した。上述以外の感染は報告されていない。

■ 2010 年度第 1 回理事会

日時：2010 年 5 月 16 日 (日) 14 時～17 時

場所：キャンパスプラザ京都 第 3 演習室

出席者：平田昌司 (会長)、三宅登之 (副会長)、荒川清秀、遠藤光暁、佐藤晴彦、古川裕、古屋昭弘、依藤醇 (以上理事)；木津祐子 (編集委員会委員長)；山崎直樹 (ウェブリソース委員会委員長)；池田巧、緑川英樹 (以上幹事)

【報告事項】

1. 一般報告

1.1 役員・委員等の異動

- ・ 大会運営委員退任
松江 崇 (北海道大)
- ・ 大会運営委員増員
岩本真理 (大阪市立大)、佐々木勲人 (筑波大)、石汝傑 (熊本学園大)、張勤 (中京大)、増野仁 (松山大)、望月圭子 (東京外国語大)、山田眞一 (富山大)
- ・ ウェブリソース委員増員
鈴木慎吾 (京都産業大)
- ・ 評議員交代
東北支部：長尾 光之 (福島大学)
→ (未定)

関東支部：依藤醇 (目白大)

→ 平井和之 (日本大)

九州支部：岩佐 昌暲 (熊本学園大)

→ 王志英 (沖縄大)

・ 支部代表交代

関東支部：今井敬子 (静岡大)

→ 山下輝彦 (慶應大)

九州支部：佐藤昭 (北九州市立大)

→ 秦耕司 (長崎県立大)

1.2 会員動向 (2010 年 3 月 31 日現在)

・ 会員数：

			増減
総会員数 (賛助除く)		1192 名	+5
(内訳)	顧問	6 名	0
	名誉会員	28 名	0
	通常会員	1099 名	+1
	(ネット)	232 名	-
	海外会員	59 名	+3
賛助会員		27 社	0

※増減は昨年 10 月 25 日を基準とした数。

- ・ 会員動向：昨年度 10 月 25 日以降、2010 年 3 月 31 日までの入会者 18 名；退会者 13 名。

1.3 事務局の所在地について

[本部所在地および会計関係]

〒606-8501 京都市左京区吉田本町

京都大学文学研究科 中国語学中国文学研究室内

[会員関係]

〒606-8501 京都市左京区吉田本町

京都大学人文科学研究所 池田巧研究室内

2. 支部例会関連

2.1 例会世話人交代

- ・ 関東支部：山田忠司 (文教大)
→ 山下輝彦 (慶応大)
- ・ 九州支部：佐藤昭 (北九州市立大)
→ 秦耕司 (長崎県立大)

2.2 今年度の例会開催予定

- ・北海道（松江崇支部代表）：1回
- ・関東（山下輝彦支部代表）：4回
- ・北陸（大滝幸子支部代表）：未定
- ・東海（丸尾誠会員）：1回
- ・関西（岩本真理支部代表）：2回
- ・中国（小川泰生会員）：3回
- ・九州（秦耕司支部代表）：2回

3. 大会運営委員会報告

岩田委員長からの書面報告を代読した。

4. 編集委員会報告

木津委員長より第2回編集委員会について報告があった。

4. ウェブリソース委員会報告

- a. 山崎委員長より、通常業務のウェブサイトのメンテナンスと『電子通説』発行、および言語系学会連合との連携についての報告があった。
- b. JSTによる『中国語学』の電子アーカイブ事業の進捗状況についての説明があった。
- c. 日本中国語学会ウェブサイト（www.chilin.jp）がウィルスに感染した件についての報告があった。

5. 大会運営委員会報告

- a. 60回大会の準備経過について、神奈川大学の準備会の構成は、加藤宏紀会員を委員長とし、運営委員でもある松村会員は会計担当。運営委員会からも支援体勢を取る。
- b. 60回大会では記念講演は3本予定されているので、補正予算による予算措置について理事会での検討依頼があった。
- c. 今年から、大会発表の申込み受付、査読、採否通知等の業務を委員会が遂行する。8月以降は、準備会に軸を移し、委員会はサポートに回る。
- d. 「研究発表応募規定」の改定を検討し、中

国語版も含め、4月初めに学会ホームページに掲載した。

- e. 来年度の運営委員会について、岩田、今井、松村、石崎の4名が退任となるので理事会から次期委員長選出の依頼があった。

【審議事項】

1. 学会奨励賞の授賞について

- ・受賞者を編集委員会原案どおり承認。大会の表彰時にその場で受賞者の研究を詳しく紹介することはできないか、検討してみてもどうかという意見が出た。

2. 次期大会運営委員会について

- ・次期委員長には遠藤理事が就任、次期の人選原案の検討は遠藤理事に一任することを承認。
- ・いったん決定された大会日程が変更されることにならないよう、今後の開催校には十分な配慮をお願いしたい。

3. 第60回大会の補助金について

- ・検討のうえで、1名分相当の経費に10万円を加えた36万円を積立金から取り崩すことを理事会案として承認。開催校に対しては、講演者に支給上限額を明示するなどの配慮をお願いする。

4. 名誉会員の推挙について

- ・有資格者を検討した。

5. ペイパルによる海外会員の大会参加費・会費納入に向けた作業の開始を承認

6. その他

- ・海外会員の入会承認・会費納入等の業務を外部委託できないか、検討を始めることを承認。

本会への寄付について

佐藤晴彦会員より本会に対し 100,000 円の寄付をいただきました。

上記、感謝をもって領収いたしました。
(事務局)

例会および全国大会開催のお知らせ

第 60 回全国大会開催のお知らせ

すでにご案内しておりますとおり、今年度の大会は神奈川大学にて 11 月 13 日（土）～ 14 日（日）の日程で開催されます。同封の大

会ご案内をご覧ください、ふるってご参加下さいますようお願い申し上げます。
(事務局)

今年度の例会実施予定

各支部の今後の例会実施予定は次のようになっています。

北海道支部：未定

関東支部：6 月 19 日（土）、12 月、3 月 [拡大]

北陸支部：3 月

東海支部：11 月

関西支部：7 月 11 日（日）、12 月

中国支部：7 月、11 月

九州支部：7 月 10 日（土）、12 月

最近支部を越えた活動も目立つようになってきたように思われます。発表者、参会者ともに歓迎いたします。ただし、開催時期および回数は変更になることもございますので、

ご了承ください。開催予定、申込締切、連絡方法などにつきましては学会ウェブサイトでご確認ください。

発表者の方には発表要旨（300 字以内）の事前提出をお願いしておりますので、よろしくお願いいたします。この要旨は本会ウェブサイト上の例会案内のページでご紹介するとともに、年に 2 回発行しておりますニューズレターにも掲載しております。

なお、開催に関する詳細は、各支部例会担当者までお問い合わせ下さい。
(事務局)

名誉会員の推挙について

名誉会員のご推挙は、9 月 30 日までに、推薦文を添えて事務局宛にお願いいたします。なお、名誉会員号授与の条件は、年齢満 70 歳以上で継続して 20 年以上本会会員であった方

のうち、本会の発展に功労のあった方となっており、評議会の審議を経た上で会員総会において決定されます。

(事務局)

事務局からのお知らせ

■ 2010年度会費納入のお願い

振込用紙を同封しておりますので、本年度会費（一般会員6,000円、ネット会員5,000円）を最寄りの郵便局からお振込下さい。事務運営上、**2010年8月末まで**にご入金くださるよう御協力をお願い致します。

郵便振替 加入者名：日本中国語学会

口座番号：00120-2-536256

なお、これまでの会費を未納の方は請求のご案内に記載してありますので、一括してご入金下さいますようお願いいたします。もし記載請求金額が15,000円以上となっておりますら、今年度ご入金いただけませんと、会則《会費納入に関する内規》により除籍となりますのでご注意ください。

■ 予稿集の販売

過去の大会予稿集は好文出版にてお求めになれます。第53、55回は1,500円、第56-59回は2,000円となっております。詳しくは学会ウェブサイトをご覧ください。

(好文出版：order@kohbun.co.jp)

■ 住所不明の会員

お知り合いの方がおられましたら、ご連絡をお願いいたします。今年度の会費請求額が¥15,000になる方には、請求の連絡が届きませんと、今年で除籍になってしまいます。ご注意ください。

石崎 潮、伊藤 丈、王 鳳莉、胡 世光、顧 明耀、謝 韞、周 艶紅、段 威、張 英納、張 麗娜、陳 碧珠、鄭 麗芸、田 忠魁、新田 幸治、法村 矩子、哈 斯、廖 娟慧

■ 今期のニューズレターについて

今号では村上嘉英先生への名誉会員号の授与を記念して、広く先生の業績をご紹介する記事を企画し、中川裕三会員に原稿をお願いいたしました。

■ 事務局の連絡先

事務局への郵便物は、下記住所宛でお願いいたします。

〒606-8501

京都市左京区吉田本町

京都大学人文科学研究所池田巧研究室内

日本中国語学会事務局

また各種お問い合わせは、学会ウェブサイト (<http://www.chilin.jp/>) 内の「お問い合わせ」ページをご利用ください。

日本中国語学会々報 2010 年春季 (年二回発行)

発行者：日本中国語学会事務局

〒606-8501

京都市左京区吉田本町

京都大学文学研究科 中国語学中国文学研究室内

E-mail: Jimukyoku.10-12@chilin.jp

URL: <http://www.chilin.jp/>

発行日：2010 年 5 月 31 日